

と言つて、一つの壺を呉れました。壺の中の水を
飲むと、お爺さんは忽ち若者になつてしまひまし
た。

其の時から、一つも年をとらずに、今でも其の
若者は生きてゐると言ふ事です。

A B C

ギーギー、グーグー、モウモウ、ガア

ーガアー

或朝、山羊と子豚がお家をこさへに出かけます
と途中で大きな牛に會ひました。

「お家を、立派なお家をこさへに行きますの」
と聲を揃へていひました。

「わたしも一緒に行きませう」

「オヤ、お手傳下さるの」

「大きな體でいたしませう」

「うれしいなあー さあ〜早く歩きませう」

ギーギー、グーグー、モウモウ三足揃つて皆で
お道をいそぎました、所が途中であすましやさん
の鷺鳥に會ひました。

「お家をこさへに行きますの」

ギーギー、グーグー、モウモウ、聲を揃へてい
ひました。

「あたいもお伴いたしませう」

と首を伸ばして申しました。

「なーがい首でいたしませう」

「これはうれしい！ 皆でいそぎませう」

ギーギー、グーグー、モウモウ、ガアーガアー
皆足取揃へて歩きました、ちつとも休まずわき目
もふらず一心不乱に歩きました、すると白い山羊
がいひました。

「こゝらでお家をこさへませう立派なお家をこさ
へませう。」

グーグー、小豚はかせぎました。

モウモウ、お牛は手傳ひました。

ガアーガアー、鷺鳥も一緒に働きました。

皆で仲よくたーかいお家をつくりました。

ギーギー、グーグー、モウモウ、ガアーガアー

お互にお禮をいひました。

森のお家

昔貧乏な樵夫がありまして三人の娘を持つてゐました。毎日早くから森へ樹を切りに出かけました。たがなかく骨が折れました。

或日妻に、

「今日は多分一日中歸つて來られないかも知れない。ずつと森の奥の方へ行きまますから晝頃になつたらお辨當を一番上の娘に持たして呉れ」

といひました。

妻は

「暗い森の中で路に迷ふかも知れませんどうもやり度くありません」

といひますと、

「そんな心配はいらない。わしはちやんと路が分る様に草の種子をこぼして行くから」

といつて樵夫は森へ出かけ路々種子をこぼして行きました。

晝頃いはれた通りにも辨當をさげて森へ行きましたが樵夫のこぼした種子は皆鳥が拾つてしまつたので路がどうしても分りません。迷つてゐます中に日が暮れて來ました。

「家へ歸るにも歸れないし、こんな恐ろしい森の中で一晩所か一時間も居られあしない」

と困つて居りますとはるか向ふにチラリチラリと明りが木蔭から見えます。

「あゝ、あそこにお家があるにちがひない泊めて

頂させう」

と元氣を振り起して歩き出しました。

破れ戸をこわく／＼そつと叩きますと中から

「お入りなさい」

と囁れた聲がいたしました。

中に入りますと爐に火が盛に燃えて側に一人のお婆さんが坐つて居ります。お婆さんの側に牝鶏に牡鶏に斑の牝牛がねてゐます。何だか薄氣味悪くなりましたが娘はいひました。

「お父上様へお辨當を持つて來たのですが路に迷つてしまいました。何卒今夜一晚お泊め下さい」するとお婆さんは側に休んでゐる牝鶏や牡鶏や牝牛に問ひ合はせました。

「泊めませうか」

忽ちコケツコツコー、クツクツクー、モーモーと皆がそれ／＼なき出しましたのでお婆さんはその意味が分り、

「ちや、娘さん、泊めてあげませう。けれど働か

なくちやなりませんよ。さあお臺所へ行つて夕

飯の支度をなさい」

といひました。

娘はシブ／＼臺所へ行つて夕飯の支度をしてお婆さんに食べさせ自分もお腹一杯頂きましたが側に居る鶏や牛にやる事を忘れしました、疲れた上にお腹一杯頂きましたので眠くて堪りませんがお婆さんは床も自分で作るのですといひましたので眼をコスリ／＼自分の床をこさへて休みましたがお婆さんの床をとるのを忘れてしまひました。お婆さんがお二階に上つて來ますと自分の床はとつてありませんそして娘はよい氣になつて眠つてゐます。お婆さんは腹を立て土間の戸を開けますと忽ちに娘も床もみんな暗い深い穴の中へ落ちてしまひました。

その晩樵夫は森から腹をすかして疲れて歸つて來ました。

「一番大きい子は何處にゐる？一體どうして、いひつけて置いたのにお辨當を持つて來なかつたのかい」と
となりました。

妻はやつぱり路に迷つたのだと知り大變に悲しみましたが樵夫は別に氣にもとめず、「なに、あした歸つて來るだらふ。あしたは二番の子に持たして呉れ」

といひましたが妻はどうしても「はい」といひません。樵夫は

「ぢや、あしたは草の種子よりも大きい麥粒を落して行かう。そのあとさへ迎つて來ればちつとも心配はいらない」といひました。

次の日樵夫は森に出かけ麥粒を落しながら行きましたが鼻が皆食べてしまひました。二番の娘がお晝頃お辨當を下げて出かけましたがやはり路が分りません。とうとう路に迷つて日が暮れてしま

ひました。するとやはり向ふに火が見えたのでいそいで行つて出て來たお婆さんに「どうか泊めて下さい」と願ひました。お婆さんは前と同じ様に鶏や牛をたずねますと皆元氣よくあきましたのでとめてやりました。二番の娘もお婆さんにいはれて夕飯をこさへしましたが鶏と牛に食物をやる事に氣がつかせませんでした。

寝る時にも一番の娘と同じ様にお婆さんのお床はとりませんでしたので夜中に土間の中が開いて一番の娘と同じ運命に落ちてしまひました。

娘が歸らないので樵夫は

「あれもきつと森に迷ひ込んだんだらふ。これで丸二日間何もたべずに働いてゐる。今度は末の娘に是非持たして呉れ」

といひました。が妻はどうしてもいふ事をききません。

「ぢや今度は豆粒を落して行くから。豆はずつと

大きいから今度は大丈夫だ」

と次の朝又樵夫は出かけて行きました。が今度も空の鳥が豆を啄んでしまひましたので三番の娘も同じく迷つてあちらこちらと歩かぬばなりませんでした。その中とうとう日が暮れ二人の姉と同じ様に火をみつけてお婆さんをたづねました。中に入りますと鶏や牛がゐるのでびつくりいたしました。だが親切に撫てゝやつたりお話をしたり、お婆さんへは御馳走をおいしくしてさしあげ又側にゐる例の鶏や牛にも夕食をやり水までも飲ませすつかり仕事ですんでからやつと空腹を満たしました。又休み時にも先づお婆さんのために柔かくお床をこさへてあげました。次の朝眩いばかりの陽に驚いて眼を醒ましますとこはいかに、皆あたりが變つてゐます。藁のお床は象牙の寢臺に、木の椅子は黄金のとなつて光つてゐます。そして自分は立派なお室の中にあつてゐます。

「これはどうしたんでせう。わたしきつと夢みてゐるんだわ」

といつて自分の手をつめつてみましたがやはり現でございました。

「さあ、これから鶏も牛もおこしてお婆さんのお馳走をこさへませう」

といそいでかけ下りますと下はすてきなお室になつてゐます真中に大きな圓いテーブルが据えられ見た事もない様な美しい王女様が坐つてゐられます。爐には眞赤な火が燃えてゐますが昨夜の鶏も牛もゐません。何處へ行つたんでせうとあたりを見廻しますと三人の侍女が竝んで御馳走を運んで來ます。娘はます／＼びつくり仰天してどうしてよいか分らなくなりました。すると王女様はすゞしいやさしいお聲であつしやいました。

「こゝへゐらつしやい、わけを話しませう。私のお父様は王様でございますが悪い魔女に呪はれ

て汚い見るかげもないお婆さんになり立派なご

殿は小屋と化し私の三人の侍女はそれ／＼牝鶏や牡鶏や牛になつてしまつたのです。誰もこのあはれな私共を元にかへす事は出来ません只親切なやさしい女の子だけが出来るのです。あなたは何んとうに御親切にして下さいました。御蔭様で昨夕すつかり私共は元にかへる事が出来ました。これ位嬉しい事はございませんこれから私は思返しにあなたを一生幸福にしてあげませう」

娘は王女様の御やさしい御言葉に只感謝する外ございませんでしたが思ひ切つて、

「でも私はどうしても家に歸らねばなりません。昨夜歸られなかつたので家ではお母様がどんなに心配してゐらしやるかも知れません。家へ一刻も早く歸つて森の中で迷つた二人の娘をお父様やお母様と一緒に探さねばなりません」

といつてお暇乞いたしませうとすると、

「マ、マアおまちなさい私も一緒に行きませう、が先づなくなつた二人を探し出させう。さあ私と一緒にこちらへおらしやい」

といつて王女は穴藏の戸を開けますと二人は喜んで出て來ました。そして可愛い妹をみてどんなに喜んだ事でございます。

やがて三人の姉妹打ち揃ひ王女様をご案内してめでたくお家に歸る事が出来ました。

——外國童話集より——

